

改正獨吟集大全

特57  
564

94  
315



特57

564

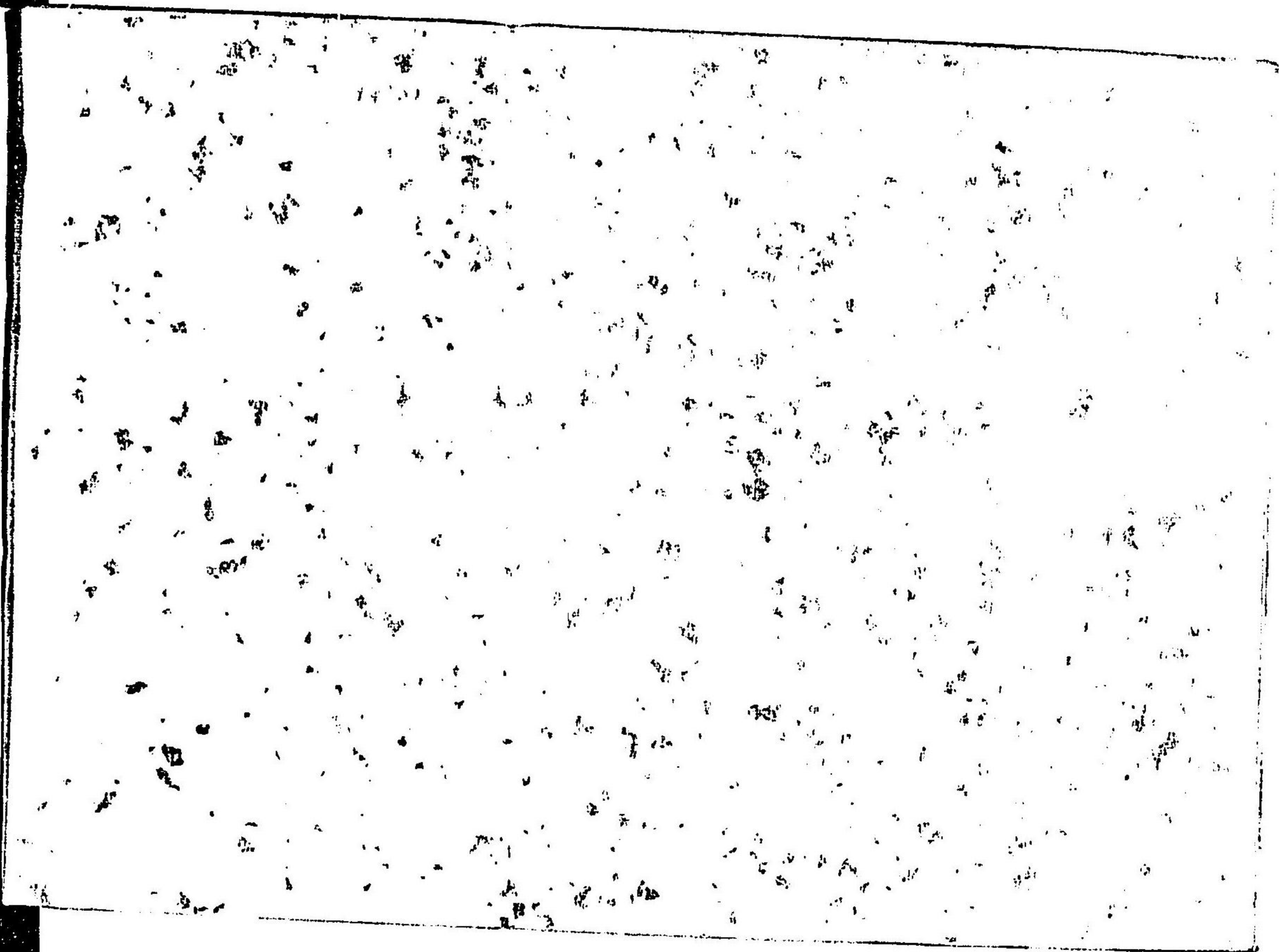
阿	媛	竹	通	清	融	實	天	井	老	率	兼	鶴	江	高
漕	捨	生	小	經	盛	鼓	筒	杏	都	平	飼	口	砂	
共	五	三	二	七	五	五	三	十	九	七	五	四	一	
志	柏	朝	小	采	養	玉	白	三	賴	紅	千	雅	斑	田
賀	崎	長	袖	女	老	葛	樂	井	政	葉	翁	波	女	村
共	五	三	三	二	六	六	五	三	十	九	九	五	二	

獨吟集

目次

十  
 九  
 八  
 七  
 六  
 五  
 四  
 三  
 二  
 一  
 内交

目次一





特57三



獨吟集

目次

阿	媛	竹	通	清	融	實	天	井	老	率	兼	鶴	江	高
漕	捨	生	小	經	盛	轂	筒	老	妻	都	平	口	砂	
共	五	三	二	七	五	四	三	十	九	七	五	四	三	
志	柏	朝	小	采	養	玉	白	三	賴	紅	千	雜	斑	田
賀	崎	長	袖	女	老	葛	樂	井	政	葉	倉	波	女	村
共	五	三	三	六	六	五	三	三	三	九	五	二		
										内交				



目次一



花	舟	角	竜	定	海	葛	吳	松	加	二	景	藤	熊	儀	梅	鷹
籠	橋	田	田	家	士	城	服	風	茂	人	清	戶	野	通	枝	
五	五	四	四	四	四	四	四	四	四	九	八	七	五	三	三	六
富士太鼓	源氏供養	春日童神	夕郎	東岸居士	鞍馬天狗	當麻	八島	西行櫻	後寬	安達原	杜若	玉井	抱行柳	忠慶	誓願寺	大愿御幸
五	五	五	四	四	四	四	四	四	四	九	七	七	六	五	世	六

葵	敦	羽	弓	錦	小	白	蟬	安	大	女	舟	芭	氷	櫻	皇
上	盛	衣	八	木	塩	髭	丸	宅	會	郎	舟	蕉	室	川	帝
六	七	六	四	三	八	七	六	四	三	一	九	七	五	四	三
輪	木	芦	鉢	唐	野	耶	盛	狸	東	三	右	百	善	山	通
藏	賊	刈	水	船	宮	郎	久	々	北	輪	近	萬	界	姥	盛
九	八	六	五	四	三	九	八	六	四	三	九	八	六	五	三



石橋	舍利	第六天	東方朔	和布刈	大瓶狸	大佛借	半藤	雲桂山	羅生門	小管	項羽	卷緒	巴	經改	九世戶	江鴻
百三	百二	百一	百	九八	九七	九五	九四	九三	九二	九一	九〇	八七	八五	八三	八二	八〇
合南	小銀治	土蜘蛛	李榮	大社	鶴龜	鴛鴦	吉野天人	住吉詣	鉄輪	野守	熊坂	花月	虎山	藤	西王母	代主
百四	百二	百一	百一	九九	九八	九六	九五	九四	九三	九二	九一	九〇	八八	八六	八三	八〇

照君	繪馬	必栖	雨月	藤笑	三笑	放生	身延	籠太鼓	淡路	弱法師	望月	碓章	知章	金札	草紙洗
百九	百八	百七	百五	百三	百三	百二	百一	百七	百六	百一	百八	百七	百七	百一	百〇
現在	雷電	土車	歌占	鳥追	松虫	枕士童	室君	放下僧	絃上	七騎落	鷲	俊成	岩船	六浦	
百九	百七	百五	百四	百三	百二	百一	百七	百六	百四	百一	百九	百七	百一	百〇	















をみよしやあやうくも  
乃軍兵の旗乃よ千平觀  
音乃覺を教つて塵をよ  
行千代成手毎大慈悲乃  
弓よ智惠乃矢をよめて  
度えあきば千のやうに雨あ  
れとありて電光石火  
み言も落れぬとくを  
矢先よ射つて鬼神の跡  
お討まよ始り有難  
や神りん咀諸毒薬入念被

觀音乃ちちをあかせて  
まの心還著於本人則還  
美於人乃敵を亡びり  
きり是觀音慈悲力あり

江口

ヨシ  
あれ時色もつて貪念乃  
思はれど又ある時色を  
つ愛執の心とありて  
思ひよるに言はれ縁とある  
物と云ふも皆人の塵れ境よ  
深は根の罪をつらり







鶉飼

上<sup>ニ</sup>面<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>様<sup>ニ</sup>や<sup>ニ</sup>鹿<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
川<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>篝<sup>ニ</sup>火<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>た<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>魚<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>連<sup>レ</sup>  
ま<sup>ハ</sup>の<sup>ニ</sup>つ<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>す<sup>ル</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>際<sup>ニ</sup>  
の<sup>ニ</sup>魚<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>難<sup>ニ</sup>  
も<sup>ニ</sup>な<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>世<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>思<sup>ハ</sup>れ<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>な<sup>リ</sup>  
白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>氷<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
ま<sup>ハ</sup>の<sup>ニ</sup>鯉<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>魚<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>玉<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>海<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>  
あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>な<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>鮎<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>ど<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
ま<sup>ハ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>思<sup>ハ</sup>れ<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>な<sup>リ</sup>  
あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>

も<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>暗<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>思<sup>ハ</sup>れ<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>な<sup>リ</sup>  
月<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
鶉<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
ま<sup>ハ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>

全

ツキリ地<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
三<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
三<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
三<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
三<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
三<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>  
三<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>



よいづねがうらたは東に  
やく社他をきくくき功  
あれく

難波

上音ハサ  
ワヤア  
あきさく  
乃ハ調お  
路の直あるは代をあり  
ハ開乃  
まの照

全

上音ハ  
ワヤア  
あきさく  
乃ハ調お  
路の直あるは代をあり  
ハ開乃  
まの照

全

ツヨク  
ゆる  
まを  
乃ち



全

自心も四方一普く一花  
びくれば天下皆春ありや  
可代乃親安んまぐめでと  
り

全

此音樂よりきつて心は  
代より出天下城守のさし  
る天下を治る萬歳  
樂よりめではさく

毎平

上清月... 浮世をわくる業

乃かく干されぬ袖もさし  
棹れぬおもぬ人なれど法乃  
人あてまゝぬさる船なほい  
くで惜む人さくくぬれ  
さく

全

一念二子乃機を顯りて  
三千人乃前後をさし圓融  
乃法を曇る月の横ハ  
そみききりや梅又麓はら



波や志賀幸濟乃一松七社  
の神輿乃密寺の梢成べ  
らく海のこめれ棹こがまゆ  
程よ遠くも向ひ乃さ  
浪の雲津乃森きちうく成  
てゆるきをさけぬの昔もあ  
れ山橋の青紫少て面影を  
夏山乃うつりゆやま毎の紫  
松の赤くも眼ぞ惜まはら  
あえ乃よきよく穢ぎあの  
雲津は早く遠きはかりく

十年

書戸をまろくと押ひらる  
まの指爪白ひらる花れ都  
今よまろくとおぐらみを  
あや東の早し遠人の心奥  
深き其情はあまき花のま  
紅葉れ秋だと思ふとありぬ  
後

幸都の町

上  
かゆをばハ霜降しとて  
蟬始たり一両葉もたへ







来あのかた此山のあふきり雪  
のふりえをいづれ惜まらば花  
威手折やまらし身梅の花  
垣のわがころん梅は花牆を  
こころ

全

此松俄は大きくなり枝を  
たき焚きあへば木の匂すま  
まよめをきて其雨をよら  
るる帝大まとりし爵  
を贈り給ひよる松を大  
と贈り給ひよる松を大

あはなり  
とあり

全

かやうなる高き松梅の花も  
も母の行末ひきよみさ  
まの守もべしわねの家  
も杉の名乃天満雲も  
れお井の花も松もあつと  
もよよらうのよらまら梅  
よろづ代のなほわ

全

上  
およめをけりしはまら梅







全

ヨラ 上野日ノコトニ在る寺乃法あり  
てカク松老考たる塚乃草  
是社をねあふ跡乃一村  
どきき乃穂よあふ川の  
名跡あるらん草岸  
露澤と古塚乃真ありん  
いあへの法ありん  
り

三井寺

ヨラ 上野日ノコトニ在る寺乃法あり  
てカク松老考たる塚乃草  
是社をねあふ跡乃一村  
どきき乃穂よあふ川の  
名跡あるらん草岸  
露澤と古塚乃真ありん  
いあへの法ありん  
り

夢と覚まは法の色を  
よせ初夜乃鐘をつく時  
諸行皆夢とひか  
上地 後夜の鐘をつく時  
生滅法と響きなり  
ひまの生滅  
下地 寐滅 為樂と響きて  
乃道の鐘乃意月も  
以て百八煩惱の  
夢乃世の迷ひも  
りやほ夜の鐘は我もみ障



かゝる雲々暗く。真如乃月の  
歌を詠然とて明きん

全

上女  
月が山風が時毎に鳴乃  
海く浪を雲津乃森み  
て海ごの巻よ向ふ影か  
れど月ハまの鏡山やま  
田やませ乃渡し舟乃夜ハ通  
ふくめくは月乃傍のたの  
づら船もこがわて出ん舟人  
しころれづら

全

上女  
月落身啼て霜天よ満  
て冷く江村乃漁火もほ  
のうよ半夜乃鐘の響音  
船もも通しし蓬窓雨志  
りて羽塩路の楫杓らま  
ねぞあつ此海ハ浪月も  
おろきてた乃友まがら月ま  
や三井寺乃鐘がらわき死

天報

古







わぬ國ぞひきりし

實感

獨りあは佛乃が名を尋ね  
尋ねく松のく舞の法乃  
場を志すぬも心は揺る乃  
細よし人も多人も志すぬ  
あはれも渡さるも他國へく  
法の舟はよも舟は舟とわ

全

崩黄白ひ乃鏡ま

崩黄白ひ乃鏡ま  
金作のたりかたうの牙ま  
くもも何の寶の由の  
葉の臺はたうも成まれ  
か聚るあはれ乃教入も村もま  
金のまはれまへくまもま  
まはれまへくまもま

玉昔

照るぼろも日暮るま  
火懸る燃のちるひあるは乃燈  
あきしうもまはれまもま







此の世はも志所下りて考の  
海をくも也覺荒昔也

全

ヨシ  
此の世はも志所下りて考の  
海をくも也覺荒昔也

全

此の世はも志所下りて考の  
海をくも也覺荒昔也

全

此の世はも志所下りて考の  
海をくも也覺荒昔也



養老

上老乃家よりそく老  
きぬ門もあふまよふ。是れ年  
ふる山もさう。あせ乃たれ  
を。松陰乃岩井乃水も薬ふ  
く。老をのへん。あつたを尚  
作。後もひりまれく

全

上老乃  
乃人乃牙。薬とあは行  
乃。是。壽。命。を。盡。ま。し。め。り。

泉がめでたけりきる。さや  
秋のあはすあはは。伐るを  
て流乃末乃秋乃まぐ。豊  
ま。海。は。続。し。ま。よ。く

全

上老  
乃。老。頭。の。竹。葉。乃。陰。や。を  
りを重あらん。是乃新乃秋花  
ハ。林。葉。乃。秋。を。汲。あり。也。晉  
乃。七。賢。乃。樂。乃。劉。伯。倫。乃。概。比  
乃。此。水。乃。鐘。き。る。乃。あ。あ。く  
乃。樂。乃。君。乃。た。あ。乃。ま。ん



全

地ニシテ浪山乃て山麓の父母たり  
ニシテ霧の霧を養ひわたり此  
水よあれ衣乃袖ひぢり結  
おま此階さかぬゆる出の井は  
りも華を思ふより若の姿も  
若水とみる社嬉しかりまれ

全

ツク  
おまはまの山乃君さふ  
すくはる水ありより船を停め  
くはる山より君をあらは

作て幾久しきもあき  
つるさへ君よりわたり玉水  
ののちを山麓に留めぬ  
瀧津の水乃つらき山麓の  
かたきもよき所代あれ  
やく萬歳乃あきらみ  
あきらみ

清經

目ク  
あきらみ  
あきらみ  
あきらみ











の親子乃契りと思ふ涙  
もつまきぬる病もど  
うりだまは海もあつ  
と眼もくろくもあつ  
のこりたれとて華  
のめも本望もあつ  
だぐい思ふ真意のほり  
しぬのきつる富士た  
まを清月を清月  
開よ終よ乃名をとめ  
も兄弟たや孝行のため

よあまきつる  
よあまきつる

竹生嶋

高  
前海乃嶺く國のあり  
の江よさる山くまの  
や花はけあぐ白雪の  
うあつる耐志くぬ山  
富士あまきつる  
乃目よ比良の根  
沖瀧舟よもつ  
れあつる思ふも雲  
れよそよ思ふも



ふなれ衣浦を隔て行はば  
行生鴻もみきたりや上江緑  
樹陰まぶむぐ魚木よのが  
る氣色あり月海上より  
しぞうちぎも浪をたし  
面白乃鴻のきまや

朝長

上方の流乃山内月あき  
くかく老もわらぐ喜ぶもの  
眼もさまの鈴鼓時を  
うらやぬ衣乃鐘の音もた  
り

渡らわぬ乃流法の夜群  
感涙もがあらりの氣絶  
り

全

あはれ衣浦を隔て行はば  
まゝあままはくはどく  
て煙をかくあまの愛をさ  
は憐れ深衣乃月も影  
るゆく光陰を惜み入る  
あまの時人あまの涙のあ  
らありは行かむら松























雲のたふしより山時鳥は  
 ちのきしも君のはれと侍が  
 原あり法下法皇池の行を教  
 強有て池水よみむかの橋  
 ちり志きそ浪の花より  
 ちりり成きれ上ありのき  
 山岩のひまより落らなく水  
 乃音はしへりかたてのく  
 乃乃垣もいたいの山登は  
 我筆うも及びかたての  
 浄堂あり上帯やあまてのま

ちりあざしれ香を焼とぼろね  
 ちりく月も又常儀の灯を  
 ちりくとりあまのあまを

梅枝

上考日  
 三ク或は若有は法老なく無二不  
 成能を後ヤ一度此經を交人  
 成仏はびとらあまの  
 月一ナニヤ常小燈の陰より  
 ももきしり人のあまの  
 夢り現うわしあまの











下ニテ  
親世者三世利益同一持者  
親ヲ執るがため慈悲あり

全

シテ  
親ヲ執るがため慈悲あり  
よの人はわが力よりぬかぬ  
法は海舟の如き棹はらで  
も儼る波岸よりりくそ樂  
を擡る國は道ありわ十惡  
邪乃事乃の雲もををれ  
善妙の月の西方も家を去  
りまの心は海に出る

此相續をとおひなり

全

地  
異香薫るどて花の香を  
上  
ま上人のまをくかたは  
天  
うては六字はくは皆一同  
ま  
る奇瑞ク邪

蟻通

上  
ヨクけきバ和歌のよわが



代よりもうきりまゝに  
倫もあまねしけり身を  
ほめざらん中も貫え  
の御書とてをうきま  
りていみじく今世のま  
志あをえりて後びを  
のし君の体のまゝある  
道とありまゝ

全

上テ  
ヨク  
ゆきまゝに相場の関の  
清水の影にありまゝ

此物をもてそいふや  
わあ、奈しとてくはせ  
新島南枝の果を胡馬  
中もあまねくしけり  
るが神心報る神意の  
もあまねくあり

忠則

上回  
ヨク  
替りていみじく今世のま  
志あをえりて後びを  
のし君の体のまゝある  
道とありまゝ



東の橋を海すくいだりも  
蘭の山をさうり内なる山  
乃様もさうりめを

全

か箱も今うもさうり吊ひ乃  
静めては舞をさうりて嬉しき  
みさうり今人のき向乃  
きさうり身よ費てさうりさうり氣  
さみしたるさ行乃ゆへさうり  
あさうりさうりさうりさうりさうり  
れゆへさうりさうりさうりさうり

さうりと夕の花乃陰よぬ  
く夢の昔もゆへさうり都へ  
さうりさうりさうりさうりさうり  
さうり本行かさうりさうりさうり  
さうりさうり

慈野

白原わんてさうりさうりさうり  
の程もなく車大路をさうり  
さうり地蔵堂もさうりさうり  
さうり観音も同座あり圍提救世  
のさうり方便ありさうりさうり







常生や袖の朽め秋の霜  
露の衣をきてこれ若を跡に  
古塚の朽木乃柳枝さびく  
陰階道りまゆもあく内  
の  
二傳の勲をゆへ

全

ヨクハ 法隆の教をいふよりきく  
上考曰 此界一人念佛を西方便  
か一蓮生但使一生常不退  
此を久つて愛よむひ上  
よまよ。美後よりう焼しき

藤戸

トヒテ 朽木に塩をくくりて  
ヨクハ 朽木に塩をくくりて  
行良の海に埋木乃  
岩の礎をあらわす  
戸のみあつた悪龍の水  
神とめつて恨をあらんと思  
ひよ思ひなりて  
法の衣をきてこれ若を跡に  
松檜の舟を浮みあまき  
の海をわたりてねがひ乃儘











佛の法をえんく社安よ  
をれ

二人静

上あハサ  
其者めをれはめめあて  
りニ  
レガク程まぢるは  
乃雪の下あるは葉を  
今く有つままヤ  
花の詩も  
山も霞て白雲乃清し然  
く道とあれく

安達系

唯是地水空のなりよ  
志づくも事とありて  
死は倫也し五道六道子  
めぐる事唯一心乃速い  
凡入向のありあるり  
業はよ人けらよあま  
あし終よ考と物あを  
もるはま夢たよなご  
とわらる我があなる  
心社根をもういなり  
をれ







ろの雨よづらひ夏あま水つ  
河隈くまぶ流るき行ため  
く

全

名川もきえ乃水はのま  
よきれあぐく月もあが  
れを尋ねてうきもも濁る  
も同じ江た清らぬ心そ  
行敷以乃あぐき年つ矢  
乃早くもあぐき年つ矢  
しそもぬらぬきまらぬ

水流きあもつ年絶きぬ  
そ平向成きぬ

俊寛

上ク家とて同じ官居と三然  
野のうく浦れも海ゆひと  
ある麻衣乃志あぐき年  
そのまくれ白衣あぐき年  
を流て教来よ志あぐき年  
れのみあぐき年  
はまあぐき年

松風



クセフ... 思ひつれ...  
... 行平の中納言...  
... 浦都...  
... 直...  
... 度...  
... 結...  
... 今...  
... 際...  
... 程...  
... 思...

上... 松...  
... 浪...  
... 夢...  
... 身...  
... 松...  
... 松...



西行橋

昔危さうあきあきも花宴の  
わりのわきもれめ草す國出皆  
成佛し清法あるべし

全

ツクセ中  
刀丸のさし柳橋をさきませ  
都のきり錦けりあきんた  
里子茶の橋を植をきう乃  
いろを可乃名よ刀のきり  
茶は花のり雲路や雪ふ  
つらねん花沙門堂れをれ

さかの四五天の紫花も是  
まいつくまじしあきあき  
黒谷下河原むし遍昭傳  
西乃引き世をいひ  
花は山どり乃ままの花  
乃色かまきりづる乃たや  
しきく思ひあわくあ  
たれなり清水寺乃地まれ  
をれ松吹うぞ乃音羽山あ  
はまの山とあまなむらる  
流津もえまどくもあ















上音ヨリ  
社はちりきせんとて  
使きまの馬を轡の  
やまのつ様手打枝が  
之も奥も味りつる  
来降よあをりてさく花を  
ちりて

定家

上音ヨリ  
かろふも音も音の  
あまのつ  
の社を  
あまのつ家の  
あまのつ家の

時を  
も  
三増の  
あまのつ  
あまのつ

東岸居士

上音ヨリ  
法乃舟に  
船れ  
舟

龍田

上音ヨリ  
舟  
舟



もみぢら葉敷ふたつを身  
のびらうぎもあきもひびく  
るまじ夜律上再探  
きいていし山行茶末國去  
をさまりて新あがらるを  
珍ひきま

夕顔

上戸ハ僧乃箇の用ひをけ  
てがけいし下女ウタ  
起れをまゝ用ひる法  
毎の下女に上戸ハ  
毎の

男子の願ひの儘はさし  
衣の袖おごころひびく  
つまんと云も思へば音羽  
山原乃松内かよひさく  
明わらるよこゝの味も  
あやも藤自道より法よ  
出づるあきざれのあき  
まじ雲すまもさし  
まじ

隅田川

上戸ハ  
ゆりても山原まじ















長地久と云ふは人けき屋出  
つゝ手をおのふ給ひ  
は面敷きより出でわかれ  
形もまがもたせうしやう  
此や陸奥のあさかた深  
の花ぐらうのし人を恋極  
の思ふももむり誰ゆぞ  
此まゝの君れため家よまて  
ごま隔あゝ月の影の  
して神ももうつらきび又  
手ももとれど唯徒よ水

乃月とて母様乃とて  
てびびりて啼居る

富士大敷

持るむら とも金とてあ  
やく真妻の爛れた敷た  
火の天よあがれ雲乃とて  
みだれし結ぶもまれても  
る所の様四方へを散ら  
みそ花衣のすもひくも  
花衣人の舞あはれ大敷乃や  
かたよりあはれ乃のまじり











ね。筆。執。し。雲。の。塵。の。ま。り。く。  
山。姥。の。あ。り。る。鬼。女。が。あ。り。後。み。る。  
や。く。と。筆。よ。か。ま。つ。る。筆。よ。  
細。着。て。へ。う。し。夏。あ。れ。よ。  
見。え。る。が。山。又。山。あ。ま。め。ぐ。  
山。又。あ。ま。め。ぐ。あ。り。し。て。行。  
へ。と。志。る。が。胸。あ。き。り。

氷室

<sup>上</sup>あ。り。る。あ。ま。め。ぐ。あ。り。し。て。深。  
み。え。る。が。山。又。山。あ。ま。め。ぐ。  
山。又。あ。ま。め。ぐ。あ。り。し。て。行。  
へ。と。志。る。が。胸。あ。き。り。

ゆ。り。あ。り。し。て。深。  
み。え。る。が。山。又。山。あ。ま。め。ぐ。  
山。又。あ。ま。め。ぐ。あ。り。し。て。行。  
へ。と。志。る。が。胸。あ。き。り。

今

クセ。コ。サ。一。  
夏。の。見。え。る。ま。で。ま。り。  
ね。冬。氷。あ。り。し。て。深。  
み。え。る。が。山。又。山。あ。ま。め。ぐ。  
山。又。あ。ま。め。ぐ。あ。り。し。て。行。  
へ。と。志。る。が。胸。あ。き。り。



雲の氷室山はもと色  
大君の歌よりのまゝ

全

花の都のまはりま  
まのまはりま  
もかたまたま  
いそげ水のたもと  
可も愛宕の郡指  
かも日の本に君は  
まのまはりま

善東

上花  
皇は其時  
明王  
降魔力  
天の相  
月之康  
南は行  
北野也  
まのま  
まのま







<sup>上カ</sup>南<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>洛<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>南<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>  
<sup>上カ</sup>洛<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>市<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>  
<sup>上カ</sup>市<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>頼<sup>ノ</sup>  
<sup>上カ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>れ<sup>ノ</sup>や  
<sup>上カ</sup>雲<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>西<sup>ノ</sup>入<sup>ノ</sup>く  
<sup>上カ</sup>ん<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>誰<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>頼<sup>ノ</sup>  
<sup>上カ</sup>ま<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>派<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>さ<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>

今

<sup>下カ</sup>佛<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>  
<sup>下カ</sup>佛<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>  
<sup>下カ</sup>業<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>父<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>

<sup>下カ</sup>あ<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>  
<sup>下カ</sup>佛<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>  
<sup>下カ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>  
<sup>下カ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>

船毎慶

<sup>下カ</sup>名<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>  
<sup>下カ</sup>會<sup>ノ</sup>社<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>社<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>  
<sup>下カ</sup>朱<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>  
<sup>下カ</sup>乃<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>  
<sup>下カ</sup>任<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>  
<sup>下カ</sup>あ<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>











ふらふら千里も同月  
の長乃あまの玉垣みとまら  
の錦かけまくもかづら  
なとがたせ

自然居士

世の中をそくかくて  
先此諸君よ同じ聖  
もんと後あまの自然居士  
雲は乃神をぬきわが  
聴るもそく乃神を濡る

然あ

全

詩  
春來散の浪乃音ぞ  
まの海  
雲まよあまの  
あは時きりる雨  
はらり  
のびらすの池乃水  
か  
の道入るまの











み、兼用舟の、人、び、あ、り、て、  
あ、ら、ま、よ、と、し、な、を、わ、ら、ぬ、  
庭、よ、う、ち、か、き、き、席、乃、尾、と、あ、  
毒、蛇、の、口、と、の、か、ま、た、る、所、  
て、陸、奥、國、へ、ぞ、ち、り、き、ま、り、

東水

春、ち、う、つ、も、露、は、雨、と、ま、き、ま、り、  
く、た、く、早、は、り、き、り、あ、さ、さ、り、  
を、い、ま、さ、り、つ、あ、と、き、ま、り、  
又、山、に、雪、を、入、て、都、の、雪、も、  
あ、づ、も、様、さ、の、ど、り、か、る、境、



全

見、多、雨、ハ、丸、重、の、東、水、乃、雪、地、  
み、と、王、城、の、鬼、門、を、守、り、つ、  
悪、魔、を、り、り、あ、り、水、の、あ、り、上、  
山、陰、の、か、も、行、や、も、急、白、川、  
乃、は、海、の、ゆ、い、さ、だ、よ、き、御、音、也、  
常、樂、の、縁、を、あ、ひ、も、う、や、庭、  
み、池、水、を、た、く、は、く、身、ハ、春、  
は、池、中、に、樹、僧、ハ、あ、り、く、月、  
下、の、つ、入、人、跡、お、く、れ、也、



てをいつらねをひそを流るる色  
めく有根ハギキヨク花の都  
あり見佛 関法のみす  
く 順達の縁きいやま  
小日友朝暮 小憚るび九  
夏三伏のあつたきて秋ま  
よりりとわがあつた 洞窟の  
松乃月一 聲乃あつたまよ  
わけて 出求ま 櫻のまをみ  
きけあまよつた 月影の他  
花生 相をえたり 東の

陰陽は時節をきふと志す  
れたる

蟬丸

上野日ノコトニサシクニ  
ミク花紫都を直出くく  
まねおおくら賀祭河やま  
る白河をうらわし 粟田口よ  
も思しうを今誰をう松坂  
や瀬乃とあつた思ふ  
あまや青羽山乃あつたの  
都や松出まき出まきりく  
すの身やゆ陰乃山科の



美人もさぐりあはれ  
 心も清く海と氣にし  
 坂の関の清水は影み  
 しるひく影を月夜  
 あやもなづかぬ水も  
 井の如き我が心は淡  
 まや髪もさぐりあはれ  
 代もあはれさるる影  
 うるさる影の影を水  
 せよ浪乃さるる影の

御

若きあはれく薬  
 菊の秋を盛るる影  
 あはれさるる影の影  
 影を水もさるる影

全

万代もさるる影の影  
 らぬ秋の夜はさるる影  
 せよさるる影の影  
 あはれさるる影の影



よふかき木の葉もさび  
と思はるる所もさびしく  
きぬ宿社めでたきれ

白髻

上高  
多クカフコトもさびしく  
髻のウケ 神の誓ひか  
くたの誓ひ此時よ生れ  
身ハ有難やく

全

静  
あきゆくも白髻の  
神風浩き清代と成  
アキユク

感久

上高  
昔在靈山は名は法華一仏  
今西方にあまた又母は  
現 給るく神の爲の觀世  
音ニ世利利益同く  
刑戮もちる身乃折るは  
クで感久が終の



道よもくろく頼もや

全

<sup>上キ地</sup>酒宴あそびの樂ツク

星のぬ日景のど如き君を

後小千秋のつるが園の松を

世のちりや花のたぐひを

うらやま長居のたれあり

がゆかにそれありとまゆり

やはりの退き出さげの感久が心

此中ぞいへま

小塩

<sup>上</sup>今も感とゆふ花のかく手

向が袖をさくはよの色を

ふまふ乃時とえそ九神を

のる塵乃世の花やゆま

後

全

<sup>上</sup>教もたげ暖もゆるぬ花を

りかく。回方たまきも

はあひみりもしよそ情の道

よ候りる老も厭ひる

全



上野の錦と成るまじり  
く様をねめりて  
花長きよきりの時き日も月  
と生相よあめがけ  
大愿やお塩巻山  
後代も思ふ志し

耶那

上野の市興よのさ乃道  
宗花の祀て一時の長  
志る雲乃上人とあがふ  
しある者群の氣色

本より高きお月  
光ハあきき花雲籠  
や阿房殿  
実をぬあけ者様  
金銀乃砂を志す四方  
とべれおの戸も出入  
お花のさるようほひ  
名よかり  
乃樂まがく  
文小千貨萬  
教をつま



















たぐひの海づりきく  
手もあつた所を  
舟の舞乃袖のたも  
て舟子たほをひき  
船子たほのたも  
はたつた急き多

おんや

上  
松高の枝もほたる  
嶺く豊の津代も  
若れつる男も

下  
やまの歌もあつた  
いのちなる神も  
海つら

全

上  
葉乃花もさ  
かちつた海も  
君の船は水は  
疎のあはびく  
毛髪もあつた  
ぞめでたき神  
あつた















全

昔ハ誠行<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>磨<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>者<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>  
<sup>下</sup>レ玉<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>ル<sup>ニ</sup>思<sup>フ</sup>人<sup>ハ</sup>本<sup>ニ</sup>誠<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>  
<sup>レ</sup>誠<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>  
<sup>レ</sup>身<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>  
<sup>レ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>

夢見上

夢見上  
<sup>上</sup>今<sup>ハ</sup>恨<sup>ミ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>  
<sup>レ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>  
<sup>レ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>

昔ハ誠行<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>磨<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>者<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>  
<sup>下</sup>レ玉<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>ル<sup>ニ</sup>思<sup>フ</sup>人<sup>ハ</sup>本<sup>ニ</sup>誠<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>  
<sup>レ</sup>誠<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>  
<sup>レ</sup>身<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>  
<sup>レ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>磨<sup>ク</sup>る<sup>ニ</sup>







のちのひまつしるの量億のた  
りては物をさしけりては國ぞ  
久しき善神の一切の福をさき  
悪神を百里にさしけりては  
浦内天都乃極の目よとの  
わねめね浦をさしけりては  
量

代主

四方の國治を雲の果ま  
てましく君を治るのあは  
くはま天降日教を山のた

ふの終時代まのあは  
まそあは首城のあ  
の言活まはまのり

全

りともあつて度みは  
神をく和光の  
まもまのまのまの  
も豊み思つて日のま  
千里が里をまのまの  
ひの海をありけりては

全



皇清の御名は高城の賀  
神代をまほし  
りあるは御名をまほし  
く四海の海を治りて國  
富民を豊かあるは御名  
貴なりき

全

皇清の御名は高城の賀  
神代をまほし  
りあるは御名をまほし  
く四海の海を治りて國  
富民を豊かあるは御名  
貴なりき

代をりきく水鳥乃妙也  
地を色りりやゆふ音  
城と同一神山を祀り  
能乃御代をまほし  
り御代をまほし

全

皇清の御名は高城の賀  
神代をまほし  
りあるは御名をまほし  
く四海の海を治りて國  
富民を豊かあるは御名  
貴なりき



九世戸

上青乃樟立光そく都  
若人も浦人も経き巴思ふ  
るさくして四方乃縁めも面  
白の松風をまきまきくさくる  
浪も白あ乃月まきく海気  
後われく

西王母

上青乃辰乃興お救くせく  
天よぬる星はまきく百官相  
雲客も千戸か戸のまきくと

なひおこまきく西方此  
邊おまきく市をの  
金銀珠玉光をまきく  
わくまきく日夜の勝芳  
あまののちのあまの  
お楽もまきく

経政

上青乃まきく乃経政  
又、年乃昔あり外より仁義礼智  
信れ五常をもちんば  
聖風月詩哥の管絃を



とて書秋を松陰乃ち露  
水乃ちあはれ世の心は他は  
中

全

上  
一 声乃鳳管秋暮の露  
中  
梧竹よとびくつりて  
つと福く帯あそぶを津守  
乃吉をたはるる聲よとて  
拜あもるる心もむすも  
をひ舞乃そで夜置山も心

うまき  
うかり乃ち水

腹

早  
見雷火もこれ悪風  
煙乃ち鶴をあげて  
涼よめえの生田乃浪をた  
水をとくし里海りも  
皆修羅なきはちまの城ぬた  
うらに海海や志づらる心  
まき  
くあへん田











よめふら日た敷ゆく雲は河  
やまた糸瀬は落るきり波も  
ちねもそのる花乃龍宮久  
手の瀬波は

全

よめふら野乃影くおもりの花乃  
種う種く嵐山たくらある  
律あそびぞ目出なる神  
遊白ぞめふたき

全

よめふらうら家も人妻乃夢は院

りも響くあまは瀬く雲乃  
うめく雲くうくく

巻之緒

よめふら天竺は花もく僧正は  
基ほき乃御手はり雲山  
の響はははもく契うく真花  
らりきひあひ乃や海奇あま  
は津をきよまびくさよ契り  
し多れはひのるま文殊乃津  
花をたがむありとまふひの佛  
くをあらわはひの和舟乃徳よ







聲乃らうららの程さめく又な  
懺み成るる程

花月

昔もれを柳見しは揚を花を鷹  
金鳥もい常よりれを揚由と程  
花月もさうりやを程をさし  
よるふりてさあもさうりてお  
かきん夢のいづ物入を心算とく  
やうもあださあさめりて大  
口はさばあさくかめを夜乃袖  
さうりて思ひさうりて花の木陰もさうり

以穿けてさうりてさうりて射  
やと思ふは佛のいさめを小教  
雲飛とてな程さうり

項羽

上  
露のりこめさ秋草れく  
や  
船よ乃さうりて天の河さ  
流りさく七夕をさうりて年よ  
一夜の心さよ秋肉さうりては  
波乃さうりて磯さうりて海士  
小船水音あさうりて船のさ















長閑な時を過ごさう

五言

美日雲りあき君乃許影も久か  
の春雨乃音も静り静路  
乃七津表通もまきか  
ゆへに浪もまきかぬ九重  
れもそひりて

全

上  
あはれいしき法入るま  
まへへ

わが心もあはれいしき法入るま  
あはれいしき法入るま  
あはれいしき法入るま  
あはれいしき法入るま

全

名  
夕ねとよころ乃そておあく  
うらとげくほきと梅り  
さきな宵に雨是ぞ阿ま  
夜のゆい  
乃花も咲自れもあはれいしき  
に面もあはれいしき







名花さるるぬあつたまらぶ  
貴人の名花さるるぬあつたまらぶ

伯吉翁

昔の奉れ神のちひひを  
和光同塵の結縁の法  
相好道入利物  
あれは國の民を  
花の清心と雅ふの法が  
名

半部

名花さるるぬあつたまらぶ  
貴人の名花さるるぬあつたまらぶ

け文鳥の葉松たるりざ  
おのづから清静とまげのみり  
や清静精進の法を南  
無常楽守作除執とを唱  
へまの今も尊守の法養育  
を時乃思ひ出らねくを  
清静の法

吉野天入

昔の奉れ神のちひひを  
名花さるるぬあつたまらぶ  
貴人の名花さるるぬあつたまらぶ  
相好道入利物